

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成19年10月号

平成十九年十月一日発行 第十七巻第十号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一九六号 〔毎月〕一回一日発行



# 端居

高橋将夫

三伏の途中で止まるフアスナー  
双肩に期待の重さ武者人形  
羽ばたいて涼しい風に乘りにけり  
なるやうになつて玉巻く芭蕉かな

回生のかちわりを置く百会かな  
赤き紐通す扇の要かな  
蚊遣火やむかし下駄屋と唐傘屋  
仮の世にミサイルの飛ぶ半夏生  
雪溪に今生の塵つもりたる  
うねりから波立ち上がる晩夏かな  
隅々の見えてきたりし端居かな

# 芋の葉

中 貞子

きはちすやパンダの眼ぬれぬれと  
三白草静かに泡あがりたる  
和紙の上に切籠灯籠影揺るる  
水嵩の増して大川蟬時雨  
台風一過倒木にある日射かな  
凌霄花はるか聞こゆる母の声  
ぶうらりと形正しき瓢かな  
箒木の向かうに笑ひ声ありし  
火伏札を給はり汗の乾きけり  
青い鳥になりて飛び立て銀竜草

## 特別作品

日焼して白衣の折目なほ白し  
ロスタイム熱気高まる土用波  
鍛練や鬼灯にいろ見えにける  
盆寺の賑やかなりし寂しさよ  
芋の葉の水玉にあるいのちかな  
伝説の町に住みゐて星祭る  
刀塚通り花野に出でしかな  
梢あつて鍬持つ嫗小鳥くる  
智恵の輪にはまつてをるや蚯蚓鳴く  
連綿の筆先軽し夜の秋

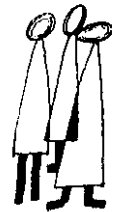
# 槐安集

水野恒彦

花ざくろの海の深さを紺で知る  
パラノイア白さるすべりの空傷む  
葦原に鳴くは雪加に違ひなし  
水中花女の唇の明るさに  
奔放に生きて悔なし夏帽子

延広禎一

だしぬけに祝ぎの二夕声青葉木菟  
蝶 蛸 みる 川の源神の恋  
昼網や観音堂に円座ある  
蓑虫の蛾となる夕べ四手揺るる  
渋団扇置かれし愛染不動かな



加藤みき

くれなゐのマニキュア十指生身魂  
きつちりと葉の筋なぞり破芭蕉  
唐津焼の大皿小皿晩夏光  
大夕焼きんぴら牛蒡作りをる  
ぷつくりと御居處おいでの形新生姜

石脇みはる

月山は夏梟の棲みかなり  
空蟬を手にとりたれば阿波の國  
日盛りや赤山禅院祀り猿  
孫子には何を残さうちんぐるま  
一八や屋外劇場はじまりし

中島陽華

海の一粒の粟夏鯨  
扇の賀子犬馳けよりきたりけり  
鏡文字朝顔市の神田つ子  
枇杷の実や花色木綿ひろげたり  
子ら通る田の花慈姑あらむしろ

竹内悦子

父の墓あり柿の木に花のあり  
一本のポプラ見てゆく夏帽子  
あきらかに山の上なり蝌蚪生るる  
夏旅や長生きさせてもらひける  
日盛りの僧も旅人旭山

旭山 旭山動物園

栗栖恵通子

鋸引きの氷一貫届きけり  
夏台風シロウミウシに曲がりをり  
てぬぐひの手摺にかかる夕焼かな  
大海<sup>おほわた</sup>や半眼にして青葉木菟  
膝に置くてのひら熱き施餓鬼かな

大島翠木

かはたれの実梅はどれも湿りあり  
梅雨茸の木の瘤笑ふまいとして  
朝涼や万葉秀歌かたはらに  
向日葵を来て巖山の昏さかな  
長涛や西瓜の皮を埋めんとす

雨村敏子

てのひらの胡桃のふたつ鳴るならむ  
菩提寺の涼しきところ人のこ糸  
金魚売大和の水を零しけり  
硯洗ふけふのわたくしこんにちは  
七月の大腿骨の歩幅なり

本多俊子

太陽へ近き道なり青い芥子  
水音に魂のとけこむ 未草ひつじくま  
カンナの黄耳なしゴツホ思はるる  
柔らかな光と陰の夜の滝  
卵焼きの表と裏と夏深し

小形さとる

顛顛しやうじゆがしばらく梅雨の男かな  
ここへきて水羊羹は難儀なり  
語るべき人と語りぬ白上布  
ひとごとのやうに生きてや竹婦人  
炎天を来てカツ井の蓋をとる

天野きく江

半壊の家持ち歩くかたつむり  
細胞の減りゆく殖ゆる竹煮草  
恐竜の骨鳴り止まぬ昼寢覚  
空間を抜けたる声の河鹿かな  
青みかん人に時間の湧き出す



# 槐市集

近藤紀子

いつの間に少年サイズ白き靴  
夕立して鉄錆匂ふ操車場  
蟻螻の不幸よ口に飛び込みし  
紫蘇色の指に染むまま点前座へ  
妥協せしものいひを愧づ半夏生

近藤喜子

千年の滴り一途なる窪み  
玉虫や美しきものより滅ぶ  
「芸術は爆発」と言ふ雲の峰  
晩涼や詩神の声に耳すます  
くろがねの錨の沈む夜の秋

柴田靖子



ささゆりやはにかみし色そのままに  
一人闇蚊の羽音さへ親しけり  
炎天に見栄も誇りもやかれたり  
干草の匂ひや海の烏なり  
日輪の燃焼まぢか旱草

鈴木勢津子

洞爺湖温泉にて  
茹アスパラ腑におさまりし洞爺の夏  
三猿が屋根で毛づくろふ梅雨の晴れ  
白と化す目高の池の水輪かな  
雨三日金魚草花の泳ぎ出す  
維摩経大賀蓮咲く紅の世へ

# 槐集

## 高橋将夫選

炎帝の宝玉たかく掲げをり  
岡崎 近藤 喜子

曼荼羅の両界むすぶ蟬の穴

掬はれし金魚まつ赤となりにけり

打水や我から風を放つまで

沖波のかすかに錆びてゐる晩夏

蟬時雨魂出し切つてをりにけり

人の世に岐路多かりし竹煮草

花合歡の飛天となりし風のあり

生きるとは不意の雷雨に遇ふごとし

また一つ夜に沈みゆく音涼し

ほうたるや父祖の証の山と川

道後温泉

枚方 中野 京子

かまきりの祈りのなりに立つ葉かげ

向日葵に集まる光ゆるる影

ガラス器と人の器と木の器

大皿に凌霄花ポツティチェリ

空海の踏みし山径蛇の衣  
枚方 近藤きくえ

冬瓜の表も裏も撫でらるる

射干を嗅いで黒谷紫雲山

風集まりて滴りの不動尊

海を焼きつくさんと大西日

背泳ぎや太平洋に寝ころびて  
安城 近藤 公子

蟬しぐれ電磁波乱してしまひさう

底無しの空に熱帯魚放しやる

雷鳥や頂上にある鍵の束

灸花オブラートにて包むもの

婀娜めいた素振もちらり心太  
京都 竹中 一花

身の内の塩出し切つて髪洗ふ

三伏の光の裾に腰おろす

洋服に仕立て直すや白緋

梅雨明けのあまりに長き竿二本

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

掬はれし金魚まつ赤となりにけり 近藤 喜子  
アレツ〜金魚つてもとは何色だっけ：意表をつく一句。それにしても、初心な金魚。

また一つ夜に沈みゆく音涼し 岩月優美子  
深い闇と静けさが伝わってくる一句。何の音かあれこれ詮索してみるのも一興。

ガラス器と人の器と木の器 中野 京子  
人の器という抽象的なものをガラスと木の器で挟む発想に脱帽。人の器とは何かを考えさせられる一句。

冬瓜の裏も表も撫でらるる 近藤きくえ  
冬瓜をひっくり返し、じっくり品定めをしている様子だろうが、「裏も表も撫でられる」とは、なんとも艶っぽい。

灸花オブラートにて包むもの 近藤 公子  
子供の頃、粉薬をオブラートに包んで飲まれた。しかし、オブラートはもっと怪しげなものも包む。

三伏の光の裾に腰おろす 竹中 一花  
「光の裾に腰をおろす」という描写に脱帽。三伏は酷暑の中に秋の気配がひそむという。裾に広がりのある一句。

法螺響み大和は心涼しかり 富松 寛子  
法螺貝の音を聞いていると、大和は涼しいという。体感だけでなく、心まですがすがしくなるところが眼目。

打水の終の水うけ 陶狸 久保東海司  
打水をかけてもらって満足げな陶狸。しかも、それが最後の締め括りの水とあって、陶狸もさぞやご満悦であろう。

笹ゆりと一本たたら山の雨 中田 禎子  
一本たたらは大台ヶ原の妖怪とのこと。雨の笹ゆりの向こうからその妖怪がやってきそうな雰囲気。

識闕のあはひに崩るる雲の峰 西村 純太  
識闕(しきいき)は意識の生起と消失の境目。入道雲が崩れ、やがて雲散霧消してゆく状態の如し。

晩涼の花盗人を許しけり 松原 伸子  
大切にしている花を盗みにきた盗人。本来ならとつちめてやりたいところだが、夏の夕べの涼しさに免じて、見逃してやろうといった心境か。

この流れ渡りきれざる蛇もぬむ 十川たかし  
必ず渡りきれぬ保障はない。しかし、流れていけば道が開ける可能性もある。沈まない限り。

片蔭の始まるどころ人を待つ 近藤 紀子  
日陰になるところで人を待つ。とは言うものの、片蔭だから炎

昼のこと。なにか屈折が感じられる。

瓶の中に青梅街道ありにける 瀬川 公馨  
青梅街道は江戸から青梅を経由して甲府に至る街道。瓶を見て  
いたら青梅街道が見えてきたという。ときあたかも、梅酒の梅  
を漬けるに格好の時節であったのかもしれない。

初蟬を聞く日空 蟬拾ひけり 谷岡 尚美  
初蟬が鳴く一方に空蟬が落ちている。それだけの景だが、動と  
静、現在と過去が同時にそこにある。時空の不思議、命の不思議  
を感じさせる一句。

阿字観や牡丹の色のただよへる 南 一雄  
阿字観は密教の瞑想法で阿の字を観想する。牡丹の色が漂うの  
は悟りの境地かもしれない。

梅雨明くる鶯の背骨の真つ平 久津見風牛  
背筋の通った鶯の姿と梅雨明けの空。まことに晴れ晴れとした  
一句。

わが胸に冥王星や熱帯夜	加藤富美子
矜褐羅をおびきだしたる杏かな	九竜 庵玄
空梅雨や朝な夕な塩加減	金澤 明子
蟻地獄ニト口の胸で覗きけり	犬塚 芳子
金亀子月に返してやりにけり	寺田すず江
少年の金のピアスや夏の果	中道 愛子
門を出づ梅雨の明けたる世界へと	柳川 晋

